

勢力低下予想より早く

台風10号

特別警報級の台風10号は6日7日に九州を襲ったが、大規模な土砂災害や水害が続発して犠牲者が多数に上る事態には至らなかった。先行した9号の影響で九州近海の海面水温が下がり、10号の勢力が弱まったとの見方も。事前の積極的な避難も奏功し、甚大災害をぎりぎり回避できた。(一面参照)

「特別警報級に発達する可能性がある」。今回の気象庁の対応は異例だった。台風10号の脅威を訴え始めたのは、はるか遠くのマリアナ諸島付近を進んでいた2日午前。九州に迫っていた9号への油断を生むリスクはあったが、5千人を超える犠牲者を出した

先行の9号が海水かくはん

水温下がり、水蒸気量減少

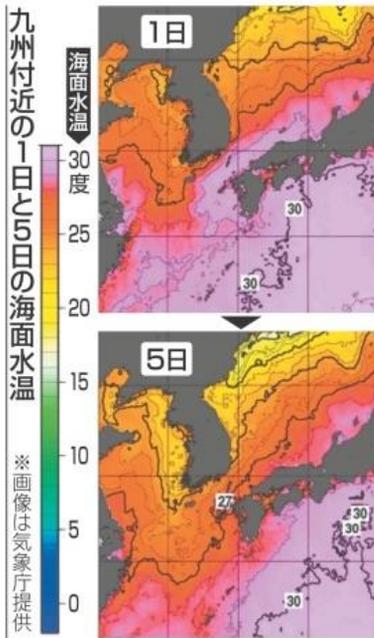
伊勢湾台風(1959年)並みに発達すると予測結果が気象庁の背中を強く押した。5日夜には台風特別警報の発表予告にも踏み切った。記録的な大雨、暴風、高波、高潮の恐れ。「昨年の台風15号より風が強い可能性」。報道機関を通じた国民向けの説明には、分かりやすくインパクトのある文言が選ばれた。

危機感の背景には、日本の南海域の海面水温が高かったことがある。8月の平均水温は30度前後に達し、統計開始以来で最高。9月も同じ状況が続いていた。暖かい海面は大量の水蒸気を生み出し台風を強める。10号はこの海域を進み、急速に発達。「非常に

強い」台風になった。状況が変わったのは6日前。勢力がやや弱まり、特別警報の発表は見送られた。「先行した9号が強い風で海水をかき混ぜた。海面水温が低下して水蒸気量が減り、10号の力をそいだのではないか」。気象庁関係者や専門家は口をそろえる。それでも台風10号は大型で非常に強い勢力を維持し、九州に迫った。安全確保に向けて新幹線が計画運休し、百貨店や商業施設は臨時休業を決めた。

これまで台風特別警報が発表されたのは、2014年と16年に沖縄県に出た2回だけ。海洋研究開発機構と東大がスーパーコンピュータでシミュレーションした結果、地球温暖化で台風の発生数は減少するが、強風域は拡大し大型化するという。今後は今回のような特別警報級の台風が九州や四国、本州に接近・上陸する可能性が高まるかもしれない。

◇ 新型コロナウイルス対策で避難所の定員を減らした結果、入りきれない人が続出した。一方で、自宅より頑丈で感染リスクが低いホテルに自主避難する動きが生まれた。



台風10号について記者会見する気象庁の中本能久予報課長＝5日、気象庁

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

今回の台風10号への対策や状況に当てはまる言葉を記事から探し書き入れましょう。

- ㊦ 2日午前、台風(1959年)並みに発達すると予測した。
- ㊧ 5日夜には台風の発表を予告した。
- ㊨ 先行した9号が強い風で海水をかき混ぜ、が低下して水蒸気量が減り、10号の力をそいだのではないかとの見方が多い。
- ㊩ 安全確保に向けて新幹線がした。
- ㊪ 新型コロナウイルス対策で、避難所のを減らした結果、入りきれない人が続出した。
- ㊫ 頑丈で感染リスクが低いに避難する動きが生まれた。